来日初日に！

ヨハンナ・ファン・ヘーデル

Johanna H.G.E. van Hedel
出身地：オランダ・スヘルトゲンボッシュ
所属：ライデン大学「日本研究プログラム」研究生（オランダ文部省派遣留学生）
日本滞在：2005年1月～8月

一月九日に私は成田空港に到着した。飛行機内ではとても興奮していたため眠れず、八時間ずっとトランプをする羽目になってしまった。私がカナダで研究を行っていた頃、日本人の友人がいたため、オランダと比較して日本がどんなに異なり、ユニークであるのかを実は彼らから聞いていた。だから来日時にカルチャーショックを受けても、準備はできていたつもりであった。八カ月間はこの日出ずる国が我が家であり、「ロスト・イン・トランスレーション」の映画のように感じられるか否か、自分自身でも体験したいとも思った。

来日して直ぐに、私はウィークリーマンションに住むことになった。来日以来時差ぼけ気味である私の、住まいに対するプライオリティーは、①シャワーを浴びられること、②十分な睡眠が取れることであった。マンション備え付けの洗面用具を使っていたが、洗髪に使用したものは、なんと食器用洗剤であった。洗髪後に気が付いたため、洗い立てのきれいなお皿の香りから二日間も逃れることができなかった。

すると洗髪後に突然、奇妙な音が聞こえてきた。最初は東京の街から聞こえる騒音だと思ったが、よく聞くと火災を知らせる警報音であった。パジャマを着て浴室から慌てて出たときには、他の部屋の報知器が作動していると思ったが、まさにこの部屋の報知器であったのだ。マンションのスタッフが私の部屋に駆けつけると、状況を察し、（日本語で私には読めなかった）浴室の注意書を私が無視したためだと説明した。シャワーの熱を除去する換気扇のスイッチを私が入れなかったことが原因であった。

そのスタッフは私の階の住人を既に避難させていたので、私は謝りたい気持ちでいっぱいだった。だがパニックした状態からふと我に返ると、そのマンションのロビー中央で、仕事から帰ってきたばかりの住人にも、パジャマ姿で「すみません」、「ごめんなさい」と謝っている自分に気づいた。その日から、私が何者であるかを住人に知られてしまった。二カ月が経過しても、エレベーターを待っていると、「あー、あの火災報知器の女性ね」と言われるのだ。

でも、落ち込んではいられない。「新しい日がスタートするんだ！」と自分に言い聞かせて、翌朝にはベッドから飛び起きた。ここでの長期滞在を正式に認めてもらうため、私には外国人登録の必要があった。先ずは役所に行かなくてはならない。一五人以上の人が、私のこの外国人登録「プロジェクト」に携わってくれたと思う。

役所の受付にいる三人ものスタッフに来館理由を説明し、申請書に必要事項を記入し、数カ所に分かれているカウンターで各々の承認印をもらう必要があった。書類の準備がようやく整ったと思ったのだが、それは手続きの始まりにすぎなかった。外国人登録カウンターの列に並ばなければならなかった。「E・T」であるかのように。更に数枚の書類に必要事項を記入し終えると、入館してから四時間も経過していることに気づいた。でも、私は日本で公認の外国人となることがようやくできたのだ！

日本滞在中の奇妙な体験は更に続く。とある本部に向かう際、ラッシュアワーの地下鉄内で押されて気まずい雰囲気になったり、コミュニケーションスキルの欠如で、ミーティングを行うと勘違いをして、私のカウンターパートに無意識について行き、男性トイレに入りかけてしまったり…。しかし友人、同僚に接するにつれ、私は日本について多くを学ぶことができた。政治や経済に始まり、人生や人付き合いに至る会話で、日本文化の不思議さは消えて無くなり、相互理解が生まれた。アジア経済研究所でのインターンシップを通じ、私は視野を更に広げることができた。ありがとう。

（前インターンシップ生／訳＝椙山貴史）